昭和四十九年三月五日　出発
昭和四十九年三月十二日帰着

歌集

九州一周の旅

主催　旭養蚕農協

松崎移翠

歌集

九州一周の旅

松崎移翠

著者略歴

松崎移翠（まつざき　いすい）

大正８年６月　埼玉県本庄市に生まれる。
現在　農民文学会会員　埼玉詩話会会員
　　埼玉歌人会会員　大宮詩人会会員
　　本庄短歌会会員　歌の傷友会会員
　　山河同人　友達同人
　　だんの会会員　きたむさし同人
著書　学級歌集　ひばりの歌　もぐらの歌　シベリヤの歌　哀しみの曲　樫の木の下で　泉の歌　みみずの唄　落日の詩（上・中・下）
　　花嫁と父　土塊の中より
現在　農業
現住所　埼玉県本庄市小島５－１－３

歌集「九州一周の旅」

平成元年９月３日　　非売品（自家蔵版）

著者　松崎移翠

発行者　松崎元一良

発行所　埼玉県本庄市小島５－１－３
　電話　0495（21）4688

印刷所　本庄孔版社
　本庄市朝日町3299－8
　電話　0495（22）4436

まえがき

吾等旅は　旅と思ほど　家にして
　　子持ち痩すらむ　わが妻かなしも

この歌は、萬葉集の中にある防人の歌であるが　彼等は関東方面より国防の為　つくしの国に　可愛い妻や子を残して　旅立ったのである。私達は九州へ行くにも汽車で行っても十四、五時間で行くことが出来るし、飛行機なら一時間で行ける。でも実際に十四、五時間の旅をして見ると、九州は遠いなあ　と、つくづく感ぜられた。この道筋を、とぼとぼと歩いた古人(こじん)達は　故郷の空の遠きに涙したことであろう。いまは関門海峡も海の底をわずかな時間で潜ってしまう為か、本州より九州に来たという感じすら少しもしない。でも北九州より南九州に来ると、自分達の思っても見なかった、まるっ

きり異なった風景が展開される　七泊八日の旅ではあったが　めまぐるしく変り行く風物に心を奪われないわけにはいかなかった。いま此処に詠じた短歌は文学的には、何んの意味もないものではあるが　私の心に映じた　九州の旅で得た尊い記録であることには間違いはないのである。汽車の中で　バスの中で　又、歩きながら　鉛筆をなめなめ記したこの歌を　旅を共にした　御世話になった人達に　御礼のしるしとして贈ることにした。

皆々様　あの節は大変と御世話様になりました。ガイドの　節子さんにも　心から厚く御礼申し上げます。

昭和四十九年三月

松　崎　移　翠

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

九州一周の旅

三月五日　（第一日）

鹿島だつ我が故郷の青き空雲一つなく山はるかなり

我を待つつくしの国に心はせて故郷の風しばし別れん

くさくさの浮世のちりを後にして我れ旅に立つ心春なり

妻の子の心にしみるくさくさの旅の荷物を背にする我は

風一つなきなごやかな日和にも心たがいて門出せわしき

しずかなる春の日和に我はいまつくしの国に鹿島だつなり

そよそよと五月の風を思わせる本庄の駅に汽車を待つわれ

麦の緑まだ色あせて桑畑の寒々と続く武蔵野の原

グラマーの口唇赤しすね足のいとなまめかし旅の春風

赤々と燃ゆる夕日を故郷の空に残して九州へ発つ

語ろうもまた話すのもうきうきと明日の旅路に心踊らす

人ごみになにも分からずひたすらに旗を頼りの東京の駅

白い車体ゆっくりと止る新幹線薄暮の都あとにして発つ

本庄より東京駅まで三時間新大阪までおなじ時間か

赤、青、黄、いろとりどりのビルの窓光の渦は谷間を流れて

旅の酒新幹線に花が咲きなにも忘れてただ語りあう

くばられし九州の地図を紐(ひも)ときてあれやこれやと明日を楽しむ

そとは闇車内は昼の座席にて眠け忘れてにぎやかな夜

浜松を過ぎて名古屋と変りなき夜の闇路を新幹線は行く

もろもろのものうきことを打ち忘れいまを楽しむ声にぎやかに

大阪が近しと聞けば人々はみなそれぞれにざわめきはじむ

小雨降る新大阪の夜のホーム耳をつんざくジェット機の爆音

どっちから汽車が来るかと議論する上りも下りも分からなくなり

せま苦し夜行寝台車の人いきれ寝つかれぬまま車両の音聞く

寝つかれぬ友の寝返り打つ音をきしむ列車の中に聞く我

いま頃は我が家の子等も寝たるかと眠られぬ夜半に我が家おもう

ざわざわと起きいでにけり我が友が眠れぬ耳になほ騒がしく

三月六日　（第二日）

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

眠られぬ夜行列車の朝まだき昔の戦記友語りあい

小雨降る下関かよ六時十分これから列車海底を行く

出征を回想して

朝霧に煙れる下関を後にして征途につきしは三十年前か

この上が海と言えどもまともには思はざらめや燈火はしれり

海底と思うまもなく門司に来て小雨の町はいま覚めんとす

目的の九州の地を目にすれば車内の人の賑いも増す

寝て起きたとは言えどもなんとなく疲れの残る旅の夜汽車よ

菜の花の咲き始めにけり朝霧の門司の関所の里の畑は

霧深く小雨に煙る山里に濡れてかぐわし菜(な)の花開きて

しみじみと空気のうまさ味わいて深呼吸する中津駅かな

バスに乗り忙しそうに案内図開きて今日の日程を見る

耶馬渓の頼山陽は草鞋(わらじ)ばき我等はバスでその山を越す

耶馬渓の霧の深きに咲く梅は山国川の水に育ちて

旅人が恐れおののく耶馬渓の鉄の鎖よ渋く光れり

治水工事　人柱の事

弾正の袴の石の謀りごと哀れ親子の人柱かな

いまもなお禅海和尚の鑿（のみ）の音聞こゆる如し青の洞門

三十年人の心の貫きをいまなお映す山国の川

霧深く耶馬の樹木のなほ深く鉄鎖つづく岩壁の道

流れ行く霧のまにまに耶馬渓の姿を映す山国の川

禅海の心根悠久に残すべく青の洞門緑濃きかな

羅漢寺

降る雨に狂(くる)う嵐に敗けもせず五百羅漢の仲の良きかな

岩をくり坂を広きていにしえの聖(ひじり)が開く五百羅漢寺

中津岳見えるはずだと言われても霧にかくれて見ることも出来ず

方言を聞きつつ笑う俺達も俺達の国の方言もあり

ちり一つ無き神苑の広々と緑もゆかし宇佐の八幡

天をつく樫の大木よ朱の鳥居宇佐八幡の神殿も朱か

宇佐八幡御手洗の水

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com